



学校だより

令和7年 2月 1日
東京都立村山特別支援学校
校長 阿部 智子

〒208-0012
武蔵村山市緑が丘 1460 番地 1
電話：042-564-2781

「村山特別支援学校は、いろいろ、賞をいただいています！！」

【第43回（令和6年度）「肢体不自由児・者の美術展」特賞2名/「デジタル写真展」銅賞1名】



1月24日（金）、水道橋にある文京シビックセンターで表彰式が行われました。本校から「肢体不自由児・者の美術展」に応募した作品の中で、中学部2年日下部善之介さんの絵画「焚き火」が特賞の「文部科学大臣奨励賞」を、中学部3年加瀬空詩さんの絵画「観葉植物」が特賞の「朝日新聞厚生文化事業団賞」を受賞しました。

また、「デジタル写真展」の部門では高等部3年大森駿之介さんの写真「夏の贈り物」が銅賞を受賞しました。文京シビックセンターでの表彰式には特賞の受賞者のみが集まりましたが、このたび、受賞者全員の作品が第43回の作品集に収められ受賞者全員に配られました。



社会福祉法人日本肢体不自由児協会主催の、この展覧会は43回を迎え、応募する年齢も様々で学齢期の方ばかりではありません。何年も創作活動に取り組んでいる方の中には、在学中から応募し、学校を卒業してもなお、挑戦し続けている方もいらっしゃいます。43回となる令和6年度は、開会式に常陸宮妃殿下の御臨席を仰ぎ、妃殿下から直接お言葉をいただくという時間も、生徒にとっての大きな経験となりました。学校での取り組みを、もっと学びたいという力に変えていくことの重要性を感じました。絵画部門、デジタルアート部門、書部門、写真部門はともに、作品に添える題名を付けた理由書が作品を語ります。

「夏の贈り物」は『春に植えたゴーヤが収穫できました。グリーンカーテンの下からのぞく空がとてもきれいでした。黄色と緑のゴーヤを並べて撮ったらいいなあと思って縦に並べてみました。』とコメントを添えて応募しています。作品とともにキラッと光るコメントや題名を付けて来年もぜひ挑戦してほしいと思います。



【令和6年度東京都特別支援学校第33回総合文化祭 将棋大会 準優勝】



1月10日（金）にオンラインによる将棋大会に高等部1年飯山優輝さんが出場し、準優勝に輝きました。当日欠席が出て、対戦相手の変更などがありましたが、動揺することなく第1戦は、水元小合学園との対戦で、40分に及ぶ対局で勝利しました。第2戦は、光明学園との戦いとなり、

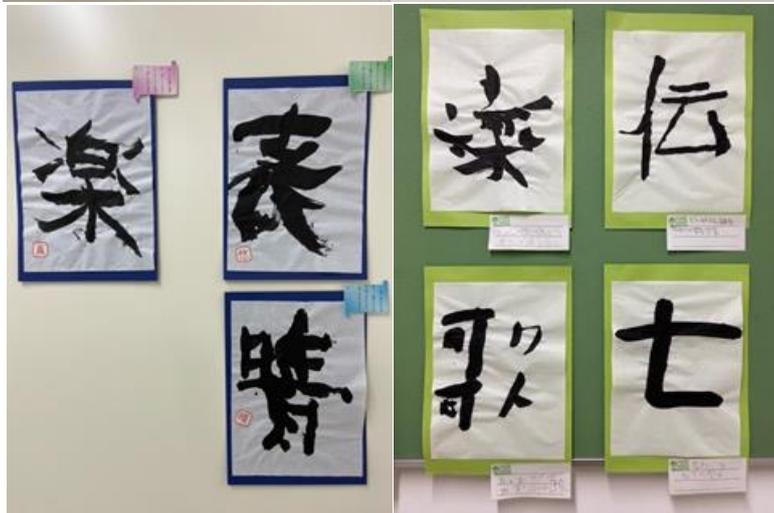
力及ばず、準優勝となりました。オンラインでの対局のため、応援の声を出すということができず、静かに応援。本校からは飯山さん1名のみのお

出場でしたが、非常に冷静に対局に取り組んでいました。将棋大会というのは「静かなる闘志」が感じられるもので、そばで見ていると手に汗握る感覚でした。これからも離れている場所でもオンラインで対局できる相手が増えて、切磋琢磨してほしいです。

【令和7年 私の一字・その後】

1月8日始業式で児童・生徒に「今年の私の漢字一字」の話をしました。今年は小学校3年生で習う漢字200字の一つである「進（しん・すすむ）」です。実は、私の去年の漢字は「調」、一昨年は、「動」、一昨々年は、「考」でした。コロナウイルス感染症に翻弄（ほんろう）された三年間は、大変だったけれど、「考えて動いて、調整して」過ごしてきました。さあ、それでは令和7年はどうしようかなと考えましたが、今年はへび年ですから、ゆっくりと、よろよろと、あちらこちら寄り道しながらも着実に『進んでいこう』と思います。

始業式で、上記のように児童・生徒に今年どのように過ごしていくのか、考えてみてください。と、お話ししました。高等部では、今年、3月に卒業して社会人になる高等部3年生もいますから、今年の自分の漢字一字をいろいろ考えてくれました。その漢字を選んだ理由や意味を短い言葉で記入してあります。広い校舎の3階の一番奥の廊下にある掲示板に貼ってあるのですが、大変わかりづらいところにあります。ぜひ御来校の際に、校舎3階奥の掲示板まで足を運んで、書かれている言葉の意味を御覧いただきたいと思います。



実際に、今年一年をどのように過ごすのか、考えて、それを言葉にして漢字に置き換えるということは、私はとても難しいことだと思います。（私が提案したミッションですが…。）

高等部の3年間は、進路と向き合いながら過ごしていくので、日々の学習の中で進路先見学や進路実習など、学校外での取組や経験を積んでいくことになります。そのことを考えながら漢字一文字に添えられた言葉を読むと、生徒の言葉に、強い思いを感じました。

「たくさんの人と話したい」「自分の願いや気持ちを伝えたい」「笑いのあふれる毎日にしたい」「自分で選ぶ」「七転び八起き」「晴れやかな気持ちで」等。

前を向いて、今年一年をぜひ、精力的に進んでほしいと思います。

【軌跡（キセキ）は、奇跡（キセキ）のようなもの】

キャリアの語源は轍（わだち）。つまり車輪の跡なのだそうです。「今までどのように歩んできたか」「周りの人とのように関わってきたか」「失敗もある、うまくいったこともある。立ち止まって、のんびりしたこともある」

これらは轍（わだち=キャリア）を見れば、分かるのだそうです。後ろを振り返れば轍（わだち）ができています。轍（わだち）の軌跡（たどった道筋）は、これから先の児童・生徒の思いを前へ前へとつなげていくのです。学び続けることが自分の軌跡となり、これから先の生き方につながっていく。

だからこそ、軌跡（たどった道筋）が奇跡（ミラクル）のようだと感じる人生になるとよいと思います。

【令和6年度「文部科学大臣優秀教職員表彰」を受賞！ 山下さつき指導教諭】

すでに被表彰歴として「平成30年度 教職員支援機構 NITS 大賞『地域連携と授業改善』優秀賞受賞」令和5年度 東京都教育委員会職員表彰受賞（特別支援教育の推進）がある、本校の山下さつき指導教諭が、1月17日（金）に東京大学 安田講堂を会場とした、令和6年度文部科学大臣優秀教職員表彰の表彰式に参加しました。山下先生は現在、指導教諭として、全都の若手教員を育成するという立場です。また、東京都の特別支援教育の研究推進を行っています。平成27年度教育研究員として「特別支援教育における言語活動の充実」、令和4・5年度「学習者用デジタル教科書等を用いた指導方法の改善検討委員会」委員として、特別支援教育分野の東京都の教育の充実・発展に寄与した功績が認められて令和6年度文部科学大臣優秀教職員表彰受賞となりました。ボッチャ競技国際審判員としても、障害者スポーツの普及・啓発に努めています。受賞おめでとうございます。

【文部科学省初等中等教育局 菅野 和彦 視学官の授業観察を受けて、深い学びを考える】

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善の取り組みとして『資質・能力を育成するための授業づくり－各教科等の「見方・考え方」を働かせる－』という副題の下、12月から小学部の音楽の授業研究を行っています。学習指導要領の音楽を形作っている15の要素を指導のねらいとして授業づくりを行うというもので、令和6年度全国肢体不自由教育研究協議会・熊本大会（全肢研・熊本大会）でポスター発表をしてきた内容を、具体的に授業に取り入れて行っているものです。その授業づくりを行うにあたって全肢研・熊本大会で御助言いただいた、**文部科学省初等中等教育局 菅野 和彦 視学官**に1月23日（木）、授業を直接御覧いただき、子供たちがどのように主体的・対話的で深い学びに引き込まれていくのか、どのように考え、自ら発信していくようになるのかについて、授業づくりを行っています。こうした研究をまとめて、その授業づくりで得た方策を、学校全体での授業改善に共有し、次年度の年間指導計画（村山シラバス）づくりに役立ててまいります。

【卒業式で卒業証書を授与するということ】

2月になりましたので、少しずつ卒業式、修了式の準備に入っていきます。コロナ禍を経てもなお、インフルエンザなどの感染症のリスク対応を行いながらの儀式的行事となります。仮設校舎の多目的室での式の対応となり、今年度も来賓の皆様を、コロナ前のようにお呼びすることは控えさせていただきます。申し訳ありません。

今年度は、高等部は代表生徒だけではなく高1、高2の在校生が参加して、卒業生の「門出の言葉」を在校生が受け止め、「送る言葉」を卒業生に伝えられるような場面を大切にさせていただきます。小学部・中学部は代表生徒が参列して卒業生への「贈る言葉」をしっかりと伝える形となります。言葉を大切にしようとして取り組んできた「チーム村山」だからこそ、子供同士の言葉の力を育むための準備に力を入れています。

どの学部も卒業学年の教職員にとっては思いが強く、最後の授業として、笑顔あふれるものにしたいと考えています。御理解のほどお願いいたします。

小学部6年生、中学部3年生、高等部3年生は、卒業式に向けた練習を行います。卒業証書は全課程修了の証明書です。証書の様式や内容は教育委員会が決めていて氏名と生年月日が明記されています。この発行に当たっては永年保存と定められている卒業証書授与台帳が基となり、大切に金庫で保管されています。卒業証書は証明書であるため敬称（～様、～殿、～君、～さん）は付記されません。一方で表彰状や賞状等には敬称が付きます。証書と賞状は大きく異なるものなのです。卒業証書には開校以来の証書番号が左上に入り、その上には割印が押されています。学校名と校長名は、今年度は、校長が毛筆で記入しました。公印が押された一枚一枚が、大切な卒業の証明書となります。

卒業証書の作成には、経営企画室の担当者が入念な準備をしてくれていることは、なかなか表に出てくることではありませんが、実は、夏休み前から証書の準備は始まり、卒業式まで半年ほどかけて作成されています。

卒業証書授与時には、お祝いに駆け付けてくださったお客様である保護者の皆様や来賓の前で校長が卒業証書を読み上げ、（身内の）卒業生に授け（授与）します。贈呈ではなく授与ですから、（身内の）卒業生の氏名には敬称を付けません。それは、決して呼び捨てではなく丁寧に卒業生の氏名を、全集中で心を込めて読み上げたいと思います。

それぞれの学部を巣立つ前の最後の学習に臨む、卒業生の自分なりの返答は、単なる点呼ではありません。卒業生の「思考・判断・表現」を我々教職員が受け止める、卒業生の姿と言葉が会場にいる皆様の心に響く、大切な場面となります。大きな拍手で各学部の全学業を成就した卒業生をほめていただければ幸いです。

どうぞよろしくお願いたします。

校長 阿部 智子